中外新聞

第十六號

定價一分

六

不許翻刻

西垣文庫
文庫10
7324
3

文庫10
7324
3

西園寺文庫

中外新聞第十六號

慶應四年四月廿三日

四月十五日　上様は道中は滞なく水戸表へ　は著弘文亭へ為入い趣彼地より來る

東久世殿并肥前侯横濱へ来著の由同處より報告あり徵士寺島陶藏并關齋右衛門等も來りし由

十六日頃結城小山の邊より戰爭有りし由よて種々の報告あり十八日十九日江戸在留の官軍追々野州へ發向す其詳なる事も未相分らず

西園寺文庫

○夫婦同寢多少の限ある話　唐通居士　譯

原本西洋情史の一章を抄出す

一夫よりて數婦を娶るは天理よりも背き家道よりも害有りとて西洋よりても古よりとれを戒るを善き教とせりされと動もすれは此戒を犯す者多うりけれも古來賢人とれを憂へ種々の教を立て竟よりも夫婦同寢の數をさへ定むるよりに至れり○モセスと云ふ人も古の大賢者と仰うるく程の人なれ共其教も時の習むしよりに從ひて立られし故よりや強ちよりに妾を置く事を禁せられす出埃及記の廿二章よりとへ妾を置く

共本妻の衣食及ひ同寢の數も之を減す可らすと說うれとも其他モセスの掟の中よりに學問の爲なれも三十日まても妻よりに遠さろるも苦しうらす職業の爲なれも七日を限とす壯年よりて職業よりに差支なけれも毎夜同寢するも妨無し假令差支有るも七日の間よりに兩度を欠く可らす但し駱駝牽も三十日の間よりに一度船頭も六ケ月よりに一度を少きの限とす又妻若し夫の同寢をいなまも其夫七日目毎よりに妻の資財を取上け資財盡るよりに至らも離緣狀を遣はすべしと云へり○其後ラビン人少しく此掟を改め學問の爲なれも二三年の間も妻よりに遠さろるも苦しうらす然れとも可成丈七日の間よ

幾度づゝも同寝する様ゝ心懸く可しと云へり○布臘國の
ソロンと云人も亦古の大賢なりしが子の法令を定め
し時ゝ毎月必ず本妻と同寝す可しと書載せとり○回く教
の國ゝも後世ゝも猶此風俗殘り妻と同寝するを夫の勤と
し妻より之を催促する事宛も債をもとるゝ異ならず是れ
其國ゝ七日毎ゝ一度ツゝ同寝を欠く可らず若し之を欠く
時を妻これを裁判所ゝ訴へ離縁狀を求むるの權あるべし
と云ふ掟あるゝ依てかるべし○以上諸賢人の教も小異同
ありと雖も皆夫の本妻を疎みて同寝の數の足らざるを戒
むるのみゝていまゝ嘗て其數の過るを戒めざりしゝ其後

數百年を經て初めて其一例を得しも殊ゝ驚く可き事とも
いたん所も今の是班牙國の地ゝ中古の世アラゴンと云ひ
し國あり其國の何とゝ云ひし女王在世の時なりしがカタ
ロニーと云ふ所の氏の妻其夫の同寝の多きを訴へ祭日と
雖も十度より少き事あらずと歎きけれも女王も之を憐み
玉ひ速ゝ其夫を召して痛く呵責し今より後一日六度ゝ過
く可らずと戒め玉ひ且後世の掟なれもとて此事を普く國
中ゝ布告し玉ひけり後来好事の輩此等の話を傳へてソロ
ンが一月ゝ一度と定めしを少きの限としカタロニーの氏
婦が一日ゝ六度を請合ひしを多きの限とする事とおもぬ

尚記事長けれた他日續きて譯出す可し

作者不詳

○暮春書感

三百年來覇氣雄豈知時運轉西東如今命脉君看取只在西郎
方寸中　郎一作鄉

失題

何事諸公爭挂冠鷄鶏無復一枚安朝々濺盡孤臣淚滿地落花
風雨寒

紀伊中納言
有馬中務大輔

○京師此觸書二通

小笠原豐千代丸
溝口誠之進
伊達伊豫守

大總督不日著よ付入城よも可相成付て之關東に取締尚奥
羽等速ふ平定よ至りい相指揮可有之いよ付早々出發東向
ゑ　仰付い事

但著府の上直相大總督へ可屆出い滞陣中と不及申途中
等揔て嚴肅よ致し不覺悟無之相可心得事

今般已よ　に親征　に出輦ゑ遊海軍　に覽之上關東時機
よ依り直相輦輿を東山道へ可ゑ爲向　思召よい右と先般

處々おいて賊臣　官軍を抗し盡く擊破ふと雖も未と
餘黨彼是屯在致居い哉よも相聞えいよ付萬民艱苦の程を
歎思召い條大總督指揮の上を速よ遂忠戰四海平定奉安
宸襟　は沙汰之事

三月

○京都は觸書二通の寫

銅錢の儀當時各國相場は斟酌の上自今一文を以て鐵六文
よ通用を　仰付い事
右も是まて其位當を得さるを以て動もすれ共奸商共異邦
へ輸出いさ〜い儀も有之候之速よ海内へ布告を　仰付い

事

三月

○　太政官

墨濱ドルの相場五七日來又少しく上りとる分かり一ドル
よ付四十四匁八分五厘より四十五匁
錢相場日々下落近日よ至て最甚し今日天保錢金一兩よ付
十貫九百三十二文　文久錢を十四貫二百文

○髮切の怪談

新聞社友元來奇怪の說を信せず然れども左の奇事を目擊

せりと云ふ人の有るに任せて附録し以て博物君子の定論を俟つ

四月廿日夜小川町歩兵屯所にて一人髪を切られさる者有り夜半の頃寝所より起きて厠に往きしに何物とも知らず直黒かる物突然と來りて頭に突當るとと覺ゆるや否や卒倒して人事を知らす此物音に驚きて人々集り介抱せしに頓て正体に成さり然るに髪を落ちて二三間も離れさる地上に在り其真黒かる物を猫の如くにして黒き毛恰も天鵞絨の如くかりしとぞ